

短歌教材

——理解・共感そして表現へ——

大石 征勝

はじめに

本稿は、二〇〇〇年十二月二十三日に立命館大学文学部日本文学会国語教育ゼミナールにおいて私がおこなった報告「短歌教材——その指導と展開（共感から表現へ）——」に、参加者からその場でいただいたご指摘・ご教示とその後私が気づいたことを加えてまとめたものである。

高等学校の国語科教科書において近・現代の短歌はどのような教材として扱われてきたか、そこには高校生による短歌表現へのどのような導きがこめられてきたか、高校生はどのような教材に触発されて短歌による表現へと進んだか、この三点について私の経験したことを報告したい。

若い人たちを「ことば」によらない無方向で激しい自己表出へと追いこみ、ときにそのすさまじい噴出にたじろいでいる「社会」を私たちはつくってしまった。あくまで「ことば」にこだわる私

たちは、今、短歌による表現にどんな可能性を見いだすことができるのだろうか。そんな思いがこの作業の根底にある。

短歌教材の形と内容

私の高等学校国語（科）教育体験は、教育課程に即しておおまかに言うならば、高等学校の一生徒としての「国語総合」体験（一九五一年度改訂版学習指導要領（試案）、以下「五一改訂時代」と略称する）、高等学校の国語科教員としての「現代国語」体験（一九六〇年度・一九七〇年度改訂版学習指導要領、以下「六〇改訂時代」と略称する）と「国語Ⅰ」・「同Ⅱ」「現代文」体験（一九七八年度・一九九四年度改訂版学習指導要領、以下「七八改訂時代」と略称する）である。なお、「五一改訂時代」は、当然のことながら、一九四八年の改正新制高等学校教育課程の上に立っている。

この間の高等学校国語科教科書における近・現代短歌の教材としての扱われ方（採択の形と内容）の典型的なもの六例を、手元

の教科書によって拾いだしてみた。次の《A》〜《F》である。
 《G》は《F》に付随するものである。また、各刊行年はその教科書の刊行年であつて、当該教材の採択初年を意味するものではない。

《A》「藤の花（短歌十五首）」（M書院『精選国語Ⅰ・新修版』

（一九八五年）

《B》「近代短歌」「近代短歌の夜明け——子規・左千夫・節

——」（K書店『国語Ⅰ・総合』（一九五七年見本本）

《C》「短歌の鑑賞」「潮の遠鳴り」（S堂『新国語総合（改訂版）

——』（一九五九年見本本）

《D》「短歌について」「秋の蘭」（M書院『現代国語Ⅰ・新修版』

（一九七八年）

《E》「折々のうた」「作品」（K出版『国語Ⅰ・改訂版』（一九九

八年見本本）

《F》『『無名者の歌』抄』『死にたまふ母』『いのちひとむき

に』（C書房『現代国語Ⅰ・二訂版』（一九八〇年）

《G》『『涙』の歌』（C書房『演習国語Ⅱ・二訂版』（一九九〇年）

*

《A》は「七八改訂時代」に属する短歌教材で、もつとも広く採られている方式である。一人の歌人について数首の作品が数名分列挙されている形である。この教科書では、正岡子規・与謝野

晶子・石川啄木・斎藤茂吉・宮終二の五人の作品が三首ずつとりあげられている。子規の二首め「瓶にさす藤の花ぶさみじかければたたみの上にとどかざりけり」の「藤の花」が教材全体の呼称になっている。

この方式は、教員も生徒も、もつとも敬遠したい形ではないだろうか。どうしても退屈な授業を予感してしまう。私が一高校生として「五一改訂時代」の末期（一九六一年度）に出会ったのもこの形であつた。このときは、一人一首の作品を割り当てられ、図書館で調べて発表する、という形で授業がすすめられたことを憶えている。「退屈な授業」を回避するための先生の工夫であつたろう。生徒の稚拙な発表を先生が逐一修正されるのが授業の実態であつたが、この学習を通して、近・現代の名歌といわれる作品についての正確な解釈を身につけることができ、私が今所有する文化の大切なひとつになっていることを考えると、この《A》方式を単純に否定することはできないように思う。

短歌教材「藤の花」について、編集者は次のような学習項目を設定している。

【研究 A】

一、それぞれの歌を繰り返し朗読して、その歌の情景をまとめてみよう。

二、「その子二十」「人がみな」「おそらくは」の短歌について、作者の生きる姿勢を考えてみよう。できたらそれぞれの時代背景も

調べてみよう。

三、「くれないの」「最上川」「あたらしく」の短歌について、自然がどのように歌われているか、それぞれの情景を通して感じられる作者の心情を味わってみよう。

四、十五首の中に歌われている「猫」「玄鳥」「馬」「群鶏」の姿を思い描き、作者がそれらのどういふところに心をひかれたか考えてみよう。

【研究 B】

一、それぞれの短歌を、リズムに注意しながら、繰り返し朗読して、印象深い作品は暗唱してみよう。

二、散文にない独自の言葉遣いや、倒置法・体言止め・字余り・句切れ・三行書きの表記などに注意し、それぞれの効果を味わってみよう。

【発展】 自然や自分の体験を見つめ直して、短歌にしてみよう。

この方式の欠点を補うべく、非常によく考えられた、無理なく短歌に入門させてゆく、高校一年生に対して親切な学習課題だと言える。またこの課題設定は、担当する教員に対して、十五首の作品がいかに意図的・目的的に配置されているかを無言のうちに語り、その熱意ある指導を促している。

ただ、「表現」に関しては、**【発展】**で一言ふれているだけであるのは、「国語表現」を新設して表現を国語学習の重要な柱のひとつに位置づけた「七八改訂」の趣旨に照らしても、不十分と言わ

ざるをえない。

しかし、子規の、写生説にもとづく平易な作品は、生徒の短歌表現に対する先入観を取り除いて、表現へと向かわせる契機として活かすことができると思う。また、啄木の三首のなかに、「人がみな／同じ方角に向いていく。／それを横より見てゐる心。」「猫を飼はば、／その猫がまた争ひの種となるらむ、／かなしき我が家。」の二首がとりあげられているが、このような屈折した諦念や実存的な心境を詠んだ作品は、彼の人口に膾炙された感傷歌よりも、似たような閉塞状況を生きる今の高校生の共感を得て、その表出欲求と響き合うのではないだろうか。高校生たちがどちらに共感を示すか、比較調査を試みる価値があるように思う。

なお、この方式による短歌教材には、「髪五尺——短歌十五首——」(S堂『新版現代国語1・改訂版』(一九七六年見本本)・「短歌」) (K出版『最新現代国語1』(一九七九年)——以上(六〇改訂時代)——、「牛飼ひが——短歌二十四首」(S堂『新国語1』(一九七九年見本本)・「冬こもる——近代短歌」(K書店『精選国語1』(一九八二年度用見本本)・「その子二十」(D学習社『国語』(一九八二年)・「十五の心」(T書籍『国語1』(一九八七年検定済見本本)・「わたつみの——近代の短歌十首」(S堂『新国語II』(一九八三年見本本)——以上「七八改訂時代」——)があることが手元の教科書によって確認できる。

*

《B》・《C》はいずれも「五一改訂時代」の教材である。両者のもうひとつの共通点は作品教材と解説（鑑賞）教材がセットになっている点である。この方式については《D》も同じであるが、その内容の相違については後述する。

《B》は「近代短歌」が作品教材、「近代短歌の夜明け——子規・左千夫・節——」が解説（鑑賞）教材である。前者には、島木赤彦・茂吉・土屋文明・釈迢空・晶子・啄木・北原白秋・窪田空穂・若山牧水・前田夕暮・木下利玄の作品が三首ずつとりあげられている。後者は斎藤茂吉が一九四三年に執筆した「小歌論」のなかの「根岸短歌会と伊藤左千夫・長塚節」の抄である。作品教材「近代短歌」が赤彦に始まり、茂吉・文明・迢空・晶子とつづいていることになげることを用意した配置である。「根岸短歌会のこと」として、正岡子規の写生説とその作品、子規門の歌人たちの交流、新詩社との相違について語り、「伊藤左千夫のこと」「長塚節のこと」として、それぞれの人と作品について語っている。「です・ます」調の平易な語り口であるが、内容的には高度である。

《C》は「短歌の鑑賞」が解説（鑑賞）教材で、「潮の遠鳴り」が作品教材である。前者は、木俣修による、子規・晶子・長塚節・啄木・白秋・茂吉・空穂・文明・利玄・迢空の作品を一首ずつあげての、高校一年生を意識した、懇切な近代短歌鑑賞法の書き下ろしである。後者には、子規・晶子・左千夫・節・空穂・牧水・啄木・白秋・赤彦・茂吉・中村憲吉の作品が、啄木が六首であ

るほかは三首ずつとりあげられている。

《B》と《C》の第三の共通点は、短歌による生徒の表現への志向がほとんどないことである。わずかに《C》の【研究の手引】の末尾に番外として「○ できれば、自分でも短歌を作ってみよう。」とあるのみである。

*

《D》は「六〇改訂時代」の教材で、方式としては、《B》《C》、とくに《C》に酷似している。つまり、「短歌について」が解説（鑑賞）教材、「秋の蘭」が作品教材である。解説（鑑賞）教材が木俣修の書き下ろしであることも《C》と《D》は共通している。「秋の蘭」には、文明・迢空・木俣修・佐藤佐太郎・椋二の作品が三首ずつとりあげられている。

木俣修による《C》《D》ふたつの解説（鑑賞）教材の根本的な相違は、後者が「解説」の素材として「現代の高校生」の作品をとりあげていることである。

「短歌について」において筆者は、十五首の高校生の作品をとりあげて、その学校での生活・家庭での生活・勉強や家事・仲間への友情や肉親への愛情など、「複雑な時代」に生きる高校生の生活感情がそこに「ありのままに刻みつけ」られていることを明らかにし、「今日、短歌という文学」が、「我々の生活そのもの、生活感情と密着して存在するもの」「極めて身近なもの」である

ことを懇切に説いている。また最後に、「更に、自らも、再びは有り難いこの人生における体験や日々の生活における感動をとどめておきたいと欲する者は、短歌表現を試みてみるがよい。そのようにしてなされた作品は、各自の心のアルバムとして、この世に生きた一筋の軌跡を永遠にとどめることになるであろう。」と表現することへ導いている。

この教材は短歌という伝統文芸を現代の高校生の手元に近づけることに成功している。私はここに「五一改訂時代」から「六〇改訂時代」への短歌教材の扱いの大きな変化を見る。

しかし、作者が高校生に限られていること、そのゆえに当然ながら作品が生活の表面しかとらえていないことに、その真似はできても、人生や社会へのより広くより深い共感をばねに表現へと高校生を飛翔させる「力」が足りないように思う。この不足感を満たしてくれるのが、後述する『無名者の歌』抄である。

なお、『B』、『C』、『D』のように解説（鑑賞）教材と作品教材がセットになっている方式の短歌教材に、「短歌鑑賞」＋「藤の花ぶさ」（K学社『現代国語1』（見本本、検定、印刷、刊行年表示なし、編集者に志賀直哉・久松潜一の名あり）・「作歌の道程」＋「近代短歌」（T書籍『新訂現代国語1』（一九七二年検定済見本本））・「私の短歌鑑賞」＋「近代短歌抄」（O社『新編現代国語1』（一九七六年））・「短歌の鑑賞」＋「青春の日」（S図書『現代国語1新訂版』（一九八〇年））——以上いずれも「六〇改訂時代」——があることが手元の教科書によって確認できる。

*

『E』は「七八改訂時代」の教材である。俳句教材との併置の形態をとっている。大岡信の『折々のうた』からの抄出再編である「折々のうた」が『A』、『D』における解説（鑑賞）教材に相当すると考えられなくもないのであるが、この教科書における扱いは独自性の強いものと思われる。「作品」には、晶子・啄木・節・沼空・近藤秀美の短歌が二首ずつ、子規・杉田久女・中村草田男・西東三鬼・加藤楸邨の俳句が二句ずつとられている。

「折々のうた」には、短歌では茂吉の「最上川逆白浪のたつまでにふぶくゆふべとなりにけるかも」・寺山修司の「マツチ擦るつかのま海に霧ふかし身捨つるほどの祖国はありや」・俵万智の「白菜が赤帯しめて店先にうつつふんうつつふん肩を並べる」の三首とその鑑賞文がとりあげられている。俵万智の短歌が高校生たちの短歌表現意欲をどれほど喚起したことか、否、現代短歌にどれほどの革命的な影響を与えたことかについては、ここで言及する必要もないであろう。ただ、俵流の「軽さ」は時代の「軽さ」そのものであり、社会の弛緩の一面でもある。そういうまでも続くべきものとは考えない。ちなみに、俳句では、高浜虚子の「金亀子擲つ闇の深さかな」、芥川龍之介の「水漬や鼻の先だけ暮れ残る」、尾崎放哉の「咳せきしても一人ひとりがとりあげられている。

一九九八年度この教科書を使った私は、『折々のうた』の大

岡信氏の要領で、『作品』の中の一作品を選んで、鑑賞文を書こう。』という課題を出した。「折々のうた」が出典・作者紹介・作品解釈・鑑賞と常におなじ形式をふんでいる点では生徒にとつてとりくみやすい課題であったようだが、鑑賞に関しては簡潔きわまる大岡信の筆法を真似きれなかつたようである。《C》の「短歌の鑑賞」や《D》の「短歌について」のような解説（鑑賞）教材のもつ意義を改めて認識させられた。

*

《F》は「六〇改訂時代」の教材である。ここには三教材が収められている。『無名者の歌』抄「死にたまふ母」「いのちとむきに」と並べてみると、『無名者の歌』抄は解説（鑑賞）教材とみられなくもないが、「折々のうた」とおなじく独自性の強いものと考えたい。「死にたまふ母」と「いのちとむきに」が作品教材である。前者は茂吉の『赤光』のなかの連作「死にたまふ母」五十九首から、事態の進展に沿って十三首がとりあげられている。全体の物語的な構成が一首の解釈をたすけ、理解と共感を深める度合いは大きいと思う。《G》はこの連作の効果を確認し得る格好の教材である。吉野秀雄が妻はつ子の死の前後を詠んだ「短歌百余章」から二十四首がとりあげられている。後者には吉野秀雄・修・佐太郎・終二の作品が四首ずつとりあげられている。

この《F》方式に近い配列の短歌教材に、「死にたまふ母」「短

歌の鑑賞」「近代の短歌」(G図書「新編現代国語①」)(一九七九年度用審査用見本本)・「死にたまふ母」「手套を脱ぐ時」「霧深き朝——新聞歌壇の歌——」(U書院「国語I」)(一九八一年検定済見本本)があることが手元の教科書で確認できる。前者は「六〇改訂時代」末期、後者は「七八改訂時代」初頭の教材である。

*

さて、教材『無名者の歌』抄であるが、これは近藤芳美著『無名者の歌』(一九七四年・新塔社刊)からの抄出再編である。『無名者の歌』は、一九五五年から『朝日新聞』の投稿歌壇「朝日歌壇」の選者をつとめてきた著者が、一九七三年までの選歌作品によって、『民衆の心の内部』から、日々の生活の中の喜びや悲しみの跡をたどった『戦後史』を書いてみたいという意図(同教材筆者紹介)によって、膨大な作品のなかから選びだした一首一首に同時代を生きる庶民の生活感情への共感をこめて解釈と鑑賞を加えた力作である。『無名者の歌』抄を単なる解説(鑑賞)教材とは考えない根拠がここにある。

目次を瞥見すると著者の意図とこの書物の性格がよくわかる。「療養所の歌」「農民の歌」「炭坑の歌」「鉄道員の歌」「工場の歌」「教師の歌」「青春の歌」「働く女らの歌」「愛情の歌」「さまざまな人生の歌」「戦争の死者らの追憶の歌」「死刑囚の歌」「安保闘争前後の歌」「日本の外からの歌」「老年の歌」「今日の日々

の歌」等など。《D》の「短歌について」に抱く「不足感」を満たすものがここにはある、という私の主張はこれで理解されると思う。

十七首の作品とその解釈・鑑賞を収めたこの教材は、私の三十二年間の高等学校国語科教員生活のなかで、出会えたことの意味を強く感じた教材のひとつである。一九八一年度の初めに《F》の教科書を手にしたときが最初であった。教材としてはこの教科書の前の版（一九七六年の改訂版）で初めて採択されたもので、私が初めて授業の実践報告をしたのもこの教材に関してであった（一九八二年一月二十六日・京都府私立中学高等学校国語科研究会第四回例会）。

『無名者の歌』抄は「七八改訂時代」には「無名者の歌」とタイトルを改めて「国語Ⅱ」に収められた。とりあげられている作品には多少の異動がある。「無名者の歌」では、『無名者の歌』抄から四首分が削除され、かわりに、末尾に短歌だけが七首新たに追加されている。この七首は生徒に解釈・鑑賞をまかす教材として追加されたものであり、解釈・鑑賞つきの十三首の学習をふまえればおのずと解釈も鑑賞もできる作品が選ばれている。この七首のなかの「かなしみを天になげうちればはれとブランコふみぬ風きりてふむ」は、前掲J書院の「霧深き朝——新開歌壇の歌——」にもとりあげられている。

以来私は短歌の学習のさいにはもちろん、他の機会（たとえば、日高等学校の一九九二年度の二年生の二年级を対象に「年間自主編成単

元学習」を試みたときに、第二単元（世の中・社会）に単独教材として配した——『論究日本文学』第五十八・五十九号で紹介）にもこの教材を生徒にぶつけつづけてきた。C書房の教科書を採択しなかった年度にはコピーをとって印刷し投げ入れ教材とした。私がこの教材に出会ったときの感動と共感を生徒にも分ちたかったからである。

このあと紹介する一九九一年度の高校一年生十一組での沖縄研修旅行歌集『赤道直下のあの近所』づくりの取りくみでは、「七八改訂時代」の「無名者の歌」（C書房『国語Ⅱ』・一九八三年）を投げ入れ教材とした。

（短歌教材の扱われ方の典型六例を検討してみ、ひとつ付言しておきたいのは、「六〇改訂時代」の豊饒さということである。）

「無名者の歌」から表現へ

一九九一年度と一九九二年度は、高等学校の専任教員としての私の二十数年の職歴のなかで初めての学級担任のない二年間であった。その一九九一年度、第一学年では十一組一学級だけを担当することになった。「国語Ⅰ」の現代文分野三単位、教科書はD学習社版であった。

この学級は外部特進生と呼ばれ、系列中学校から上がってくる内部特進生とともに特進コースを構成する生徒たちであった。ちなみに、この年度の内部特進生二年级が二年生になったとき（一

九九二年度)に実践したのが前掲の「年間自主編成単元学習」の試みである。

一年生十一組は三十五名の、指導しやすい学級であった。H高等学校では毎年二学期末に一年生が沖繩に研修旅行に行くことになつており、二学期の後半になるとさまざま事前学習が展開された。「国語I」現代文分野担当の私は、沖繩学習の国語教材として山之口嬢の「私の青年時代」(S堂「新国語II」(一九八三年))を投げ入れ、「無名者の歌」の学習を経て、沖繩で各自十首の短歌をつくってもらい歌集にまとめることを構想した。歌集のタイトルを「赤道直下のあの近所」とすることに決めたのは、「私の青年時代」の学習で引用詩「会話」を扱ったときである。恋人から「お国は?」と聞かれ、「沖繩」と答えることができず、「ずつとむこう」「南方」「亜熱帯」とこまかしつづけ、ついに「赤道直下のあの近所」と答えたという、沖繩への差別を哀しみ、抗議する詩句であった。

さて、「無名者の歌」の学習であるが、この教材にとりあげられている作品だけをまず列挙しておく。《D》の木俣修の「短歌について」に私が抱いた「不足感」が何であったかを再度確かめていただけたと思う。

夏草に友と夢みしサークル誌実現せず
に受験近づく

思慕告げず別れ来し吾を深しと思えど湧き出ずる
悲しみに泣く
いつの日か春光に並び歩みたきねがい罪のごとき
らめきのごと

降る雪が雨に霰あられに変わる街を歩みぬ今日より君は婚約者
少女さび帰還の決意告げし日の金城順子も海越えゆきぬ

ラジオ講座学ぶ女子工に夜警所の机ゆずりて巡視に立てり
白つじ雪崩ゆがみるごとく咲く路を素足に踏みて苗植えにゆく
大根も菜も漬け終わり雪となりしこよいは妻の昏々こんこんとねむる
やがて死ぬ娘にてあれど生業なりわいの靴つくりやり枕まくらべに置く
幼きわれに風花を教えし父よ葬りの日なお心にも舞う

月光に光る白萩両手もて触れて征きし学徒兵君はも
戦いのまこと何かは知らずとも失いし父の墓にうづくまる子は
汚染なきを必死に告げつつ売り歩かれもわが荷も濡れて冷たし

(以上は近藤芳実の解釈・鑑賞付き)

雪にまみれ走り来し列車引き継いで坐る運転席友の温もり
百姓に生まれしことの幸不幸月夜にひとり峽の畦塗る
子ら坑に死なして三年春めぐる閉山の町に生きて老醜
夜学三年学び終えたる少年工を今宵は祝う老工われら
かなしみを天になげうちはればれとブランコふみぬ風きりてふむ
魚売り悲しきまでに生臭き父を愛する末娘われは

肩も触るる近きに坐れど君はただ受験のことのみ吾に問いけり
(以上は作品のみ)

実際の学習は、ほぼ「学習の手引き」にしたがってすすめた。

一 それぞれの歌を読み味わって、心ひかれた作品をノートに
抜き出してみよう。そして、どんな点に心がひかれたか、自

分のことばでメモしておこう。

↓ この年度も、翌年度も生徒が最も多く「心ひかれた作品」は「やがて死ぬ娘にてあれど生業の靴つくりやり枕べに置く」であった。ところが、一九九三年度の一年生では、「この歌と「夏草に友と夢みしサークル誌実現せず」に受験近く」とが同数となった。

二 全体を読み返して、もう一度、次の観点からそれぞれの歌を確かめてみよう。

⑦ 題材が身近で、自分の気持ちにびったりするもの。

⑧ 自然や生活の描写が印象的なもの。

⑨ 社会の動きをよく反映しているもの。

↓ この後は、各作品への近藤芳美の解説文が解釈の部分と鑑賞の部分から成っていることを確認させ、文語表現や句切れや体言止めなどについて作品に即して説明し、沖繩ではこのような技法も試みてみよう、と話した。

三 「雪にまみれ……」以下の歌について、作者の年齢や生活環境を推測し、作品の描写を通して、歌われている情景をできるだけ具体的に思い描いてみよう。

四 一つの作品を取り上げて、鑑賞文を書いてみよう。

↓ 私はこの課題を、「三」の七首のなかの一首を選んで書くように、と指示した。

このような事前学習をしておいて、十首の作品を書きとめる用紙をポケットに生徒たちは沖繩に出発した。学級担任のなかつた

私も付き添いとして参加した。知り合いの生徒はこの三十五人だけなので、四日間ほとんど行動を共にした。

作品の提出日は三期の最初の授業の時と指示してあったが、全員の作品が集まったのは約一週間後であった。一人につき七首から八首を私が選びだし、B6横判見開き二ページに印刷し、ロングホームルーム一時間をもらって全員で製本作業をして、七十ページの歌集『赤道直下のあの近所』が完成したのは二月十日であった。「まえがき」を学級代表のK君が書き、表紙はY君が沖繩の多くの慰霊碑を組み合わせた絵で、裏表紙はA君が守禮の門の絵で飾ってくれた。この歌集を全員に配布し、そのなかから自分の作品以外の一首を選んで鑑賞文を書くことを最後の課題とした。全員が提出したのを印刷して配布した。

この歌集は、怠惰な私が国語科教員歴二十数年をすぎず初めつくった生徒の作品集である。そして、翌年の「年間自主編成単元学習」の記録文集である『この手に載るほどの証明書』から一九九九年の『命(ぬち)』まで、私は年一冊の文集つくりを継続することとなった。学級担任のない二年間がその発火点であった。教材「無名者の歌」が生徒の短歌観を変え、表現へと飛翔させた一例として、K君が書いた「まえがき」を紹介しておきたい。

まえがき

私は、短歌は古臭く形式的なものだと思っていました。ところが、

今年度の二学期に、「無名者の歌」という新聞投稿歌による教材を勉強したことで、短歌は、自分の感じたことや考えを思いのままに表現できる文学だということを実感しました。

その「無名者の歌」のなかで私が最も感動した歌は、

思慕告げず別れ来し我を深しと思えど湧き出ずる悲しみに泣く

という一首でした。私は中学の時に片思いをしていましたが、この歌は私を中学時代の私に重ね、その時の自分の相手への思いを思い出させ、感動しました。そして自分もこのような短歌をつくりたいと思いました。(以下省略)

なお、「無名者の歌」を生徒の短歌表現に活かした全力的な教育実践に神戸工業高等学校(夜間定時制)の南悟教諭の活動があることを付記しておきたい。『定時制高校青春の歌』(一九九四年・岩波ブックレット三五一)・『ニッカボッカの歌』(二〇〇〇年・解出版社)の二著がある。

表現が立ちあがる場

すぐれた教材が生徒の表現意欲を喚起することはK君の「まえがき」がよく語っているが、表現にはそれが立ちあがってくる「場」のようなものがあることを、このときの取りくみの一経緯

は私に実感させてくれた。このことについて、最後に言い添えておきたい。

歌集『赤道直下のあの近所』にN君の次のような作品が載っている。

太陽が沈み消えゆく水平線真つ赤に染まる沖繩の空

この作品に対して、M君は次のような鑑賞文を書いている。

この作品は研修旅行の三日め、オクマの砂浜から見た夕日を歌ったものであろう。作者はこの時、夕日の沈む速さを見て、時間の速さを感じ、あつという間に終わろうとしている研修旅行を名残惜しんでいると思う。そして、ひめゆりの塔・糸数壕・宮良ルリさんの話などで学んだ沖繩戦の無残さを思い出し、二度と、この美しい沖繩の地を、夕日で真つ赤に染まった空のように、血で真つ赤に染めるようなことがあってはならないと思ったのだろう。一見、夕日の風景をただ見たままに歌っているようだが、この歌の中には、作者のさまざまな沖繩に対する思いが含まれているような気がする。

じつは、一九九一年十二月二十二日の夕方、N君とM君と私は、研修旅行の最終宿泊地オクマリゾートの海岸に腰をおろして東中国海に沈む夕日を眺めていたのである。私は写真を撮ろうとしていた。沖に浮かぶヨットの帆柱と風をはらんだ帆の間に太陽が入

つたらシャッターを押そうと構えていたのである。その横で、N君は「太陽が……」の歌を推敲していたのである。M君は三日間の研修旅行の印象を反すうしていたのである。のちにN君のこの作品を見つけたM君は、おそらく躊躇せずこの作品の鑑賞文を書くことにしたのだ。この鑑賞文はM君にしか書けないものであり、彼はN君の作品を通して自分の沖繩体験を語っているのである。

私はシャッターチャンスを逸した。

おわりに

そもそも、二〇〇〇年十二月二十三日の国語教育ゼミナールでの私の報告は、短歌教材による実践報告をしていたく予定であった方の急な事情による辞退をうけての代役的なものであり、その実践例はふるく一九九一年度のものであった。

また、提示した資料も、二〇〇〇年三月に本務校を退職した私



の手元にある限られた高等学校国語教科書（古い見本教科書の廃棄のたびに受領してきたもので、その収集に系統性はない）によるもので、ある教材の初探択時の確認、あるいは、おなじ教材の改訂毎の内容の異同の調査もわずかしかできていない。自分が使った教科書を中心にして、たまたま手元にあったものを案配しただけの不十分な資料である。

このような事情であるから、編集部から執筆を依頼されたとき、受けてよいものかどうか、ずいぶん迷った。迷った結果、けっきょく駄文を草したのは、「はじめに」に書いたように、若い人たちを追いつめる現代日本社会の状況をふまえた「表現学習」への思いがあつたからである。しかし、このような文章を読んでいたくよりは、南悟氏の二冊の著書を読んでいたくことのほうがよほど意味があることを、付記しておきたい。

（おおいし・まさかつ 本学非常勤講師）